

発生サイドからみた過去10年間における 海浜型レクリエーションの特性変化

～海浜リゾート成立のための諸条件の検討～

渡辺 貴介* 沼田 洋一郎*

The Behavior of Participants in Seashore Recreation in The Past 10 Years

Takasuke Watanabe, Yoichiro Numata

This report shows the transformation of the seashore recreation past 10 years, analyzing the behavior of participants so that introduces some ideas necessary to realize the seaside resort. The results of this report are as follows:

1. The participation in the seashore recreation is inclined to The young people and so it makes a flat proportion like a health recreation to join different typed activities in the age .
2. Now a days, the seashore recreation tends to have only the active function and so it is necessary to include other functions like a enjoying the natural beauty and being at ease in the seaside area.

はじめに

わが国は、これからますます社会が成熟し、時間的、経済的、精神的にも“ゆとり”の時代を迎えようとしている。それに伴ない、海浜型レクリエーション活動も量的、質的に変化が生じることが予想されるが、その需要を受けいれる環境や施設に目を向けると、果たして将来のニーズを満足しうるかは疑問である。

わが国における観光レクリエーション施設整備の経緯として、昭和40年代に始まる八ヶ岳一帯の高原リゾート開発などがあり、これによって山型高原型レクリエーションが宿泊を伴う形で発展してきたのに対し、海浜型レクリエーションのための施設は、相変わらず貧弱であると言わざるをえない。

したがって、これからの海浜型レクリエーション空間の整備の課題、方向を早急に明らかにしておく必要があると考える。

1. 研究の目的および基礎資料等

本研究では、社団法人・日本観光協会が1年おきに、東京圏に在住する16才以上の男女を対象として行っている「大都市住民の観光レクリエーション・東京編」¹⁾の第2回から第7回までの調査資料にもとづき、分析を行なっている。

過去10年にわたる海浜型レクリエーションの実態を発生面からとらえ、変化した点、変化しなかった点について時系列的に分析するとともに、山型高原型レクリエーションとの比較を行なうことにより、海浜型の特徴を明らかにする。

さらに、得られた知見から今後の動向を把握し、発生面からみた海浜リゾート成立のために必要な環境、施設の整備課題、方向を導びくものとする。

*東京工業大学社会工学科 (Tokyo Institute of Technology)

2. 分析の方法

(社)日本観光協会の調査結果によれば、昭和47年から58年までの10年間に、日帰り、宿泊を含めたレクリエーション全体²⁾の一人あたりの発生回数(参加回数、回/人)は、49年の5.3回/人が最高、54年の2.5回/人が最低というように大きな変化がみられた。しかし、うち宿泊観光レクリエーションの参加回数においては、10年間横ばい傾向が続いている。(図1)

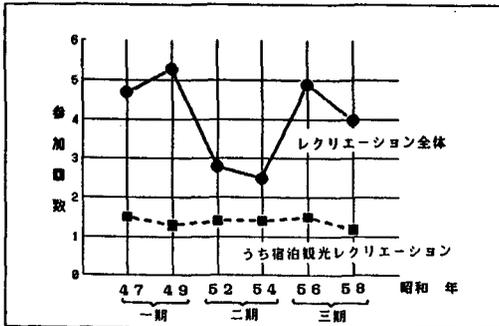


図1 過去10年間におけるレクリエーション量の変化

このような状況をふまえたうえで、過去10年間の海浜型レクリエーションの変化の特徴を抽出するために、当時の時代背景をふまえて、この期間を3つに区分して考えることにした。

47年～49年の高度経済成長末期から第一次オイルショック直後までの観光レクリエーションが活発に行われていた時期を一期、52年～54年の第二次オイルショック前後のレクリエーション量が低迷していた時期を二期、56年～58年の回復期を三期として以下の分析を行った。

3. 海浜型レクリエーション活動の量的変化

この10年間における海浜型レクリエーション³⁾の発生量を日帰り、宿泊別にみると、日帰りで行なわれる場合の伸び率⁴⁾は、一期を100とした指数で61にすぎず、これはレクリエーション全体の平均の82をも下回っていた。その結果、全体に占める海浜型レクリエーションの割合(シェア)も、26.1%から19.3%へと大幅な減少がみられた。

山型高原型レクリエーション⁵⁾においても、ほぼ同様の傾向がみられ、伸び率の低迷、シェアの減少という点で両者が共通の傾向を示した。(図2)

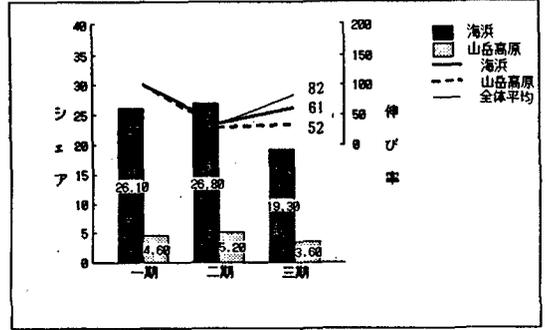


図2 日帰り観光レクリエーションの実質伸び率とシェア

一方、宿泊で行なわれる場合は、レクリエーション全体の平均が三期において98と横ばい傾向をみせているのに対し、海浜型、山型高原型ともに伸びている。

しかし、二期以降の伸び率に大きなちがいがみられ、海浜型の122に対し、山型高原型は209と10年間に2倍という急増ぶりを示した。この変化に伴ない、山型高原型のシェアも、7.4%から15.8%へと大きく拡大し、海浜型との差が急速に縮まりつつある。(図3)

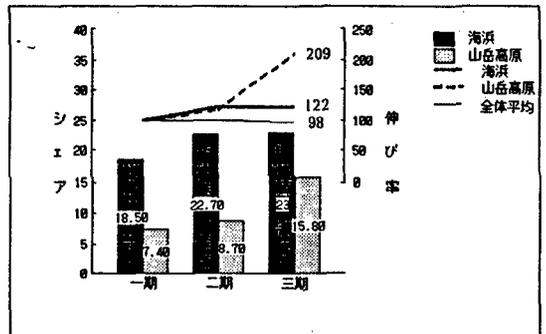


図3 宿泊観光レクリエーションの実質伸び率とシェア

この10年間において、日帰りの場合には減少という点で両者にはほぼ同じ傾向がみられたのに対して、宿泊の場合には伸び率に大きな差がみられたことは注目すべきことであり、宿泊を伴う形でのレクリエーション施設の整備状況とも大いに関係があると考えられる。

また、今日の動向として、観光レクリエーション活動の宿泊化が進んでいることもあげられ、従来、日帰りを中心に行なわれていた海浜型レクリエーションも、三期ではレクリエーション全体の平均を上回るなど、徐々に宿泊化への移行期を迎えている。(図4)

さらに、海浜型レクリエーションを構成する諸活動について、発生量の面からどのような変化がみられたかを、日帰り、宿泊別に分析した。(図5)

日帰りの場合には、海浜型の全体量が減少しながらも、近年における海の水質回復傾向や東京湾を中心とした人工海浜の整備状況などを反映して、海水浴が最も安定した動向をみせた。シェアにおいても、プールが年々減少傾向をみせているのとは対照的に、一期の28.1%から33.6%へと増加している。

また、釣りが30%前後のシェアを保ち続け、これまでシェアの小さかったヨット・ボートが1.5倍の伸びをみせるなど、日帰り海浜型レクリエーションの多様化が進んできていることがわかる。

一方宿泊の場合では、海水浴の占める割合がこの10年間でわずかに減少しているものの、三期では50.2%と依然として半分以上を占めていることから、宿泊海浜型レクリエーションの中心は海水浴であるということが出来る。

釣り・潮干狩り、ヨット・ボート、プールの活動は、日帰りで行なわれる場合が多く、海浜型レクリエーションの多様化は日帰り、宿泊に共通の傾向ではあるものの、日帰りの場合に特に顕著である。

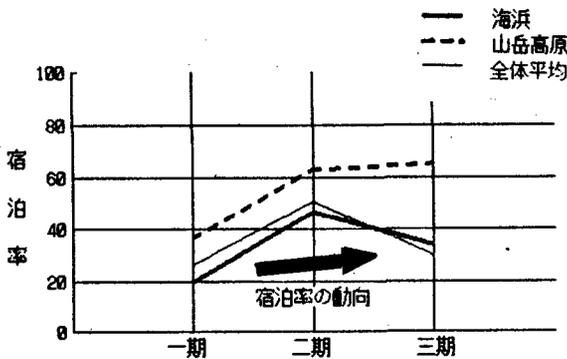


図4 近年における宿泊率の動向

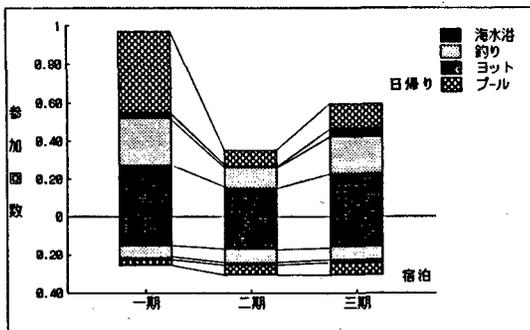


図5 海浜型レクリエーション活動の構成

4. 海浜型レクリエーション諸活動の個別特性

次に、個々の活動が質的にどのように変化しているのかを分析し、変化した点、変化していない点に分けて整理した。(表1.2)

海浜型レクリエーションの諸活動を質の面からとらえると、海水浴、ヨット・ボートといった変化の少ない活動と、釣り・潮干狩り、臨海プールのように変化が多くみられる活動のふたつに分けることができる。

前者のグループに共通してみられる特徴は、海浜型レクリエーションの中でも、比較的若い世代が中心となっていることであり、この若者中心型の参加傾向が変化することなく継続している点である。

これはスキーにもみられる現象であり、若者を中心として行なわれる活動が他の世代には受け入れられにくく、活動層のひろがりに乏しいという特性を持つことがうかがえる。

一方、後者のグループにおける変化の方向は、泊まりがけでの臨海プールのように、発生量そのものがすくなく活動、あるいは女性層の釣りのように、ある活動に対して極端に参加が少なかった属性など、いわゆる“少数派”がこの10年間に急速に伸びているということが出来る。

ここで、山型高原型レクリエーションの登山・ハイキングを比較としてとりあげると、やはり多くの項目で変化がみられているが、泊まりがけの活動の場合に、唯一中高年齢層の参加が増加し、これまでの若者中心の参加傾向が徐々に解消する傾向が認められた。

これは海水浴をはじめとする海浜型の活動が若者中心の参加傾向を示し続けているのとは対照的な現象である。

この相違は両者におけるリゾート的施設の整備状況に関係しているとも考えられ、環境を整え、施設を整備することによって、活動の機会を提供すれば、これまで以上に利用者層をひろげることが十分に可能であることを示唆するものである。

さらに海浜型レクリエーションの特徴として、全般的にシーズン性が大きく夏期集中がみられること、活動の目的が10年前には行楽、スポーツ、避暑など多様であったのに対して、現在ではスポーツというひとつの目的に集中してきている点をあげることができる。

	海水浴		釣り瀬干狩り		ヨット・ボート		臨海プール		登山ハイキング		温泉浴	スキー	
	日帰り	宿泊	日帰り	宿泊	日帰り	宿泊	日帰り	宿泊	日帰り	宿泊	宿泊	宿泊	
参加傾向	性別面				男性型		女性型						
	年齢面	男	若者型	若者型		若者型						高年型	若者型
		女											
	年収面		関係しない		比例する				比例する		比例する	関係しない	
	週休制度面		関係しない								比例する		
同行者の種類	家族		友人知人		家族		家族		家族		友人知人		
活動の時期	夏期にピーク						夏期にピーク				ピークなし 冬期にピーク		
活動の目的											スポーツレク		

	海水浴		釣り瀬干狩り		ヨット・ボート		臨海プール		登山ハイキング		温泉浴	スキー	
	日帰り	宿泊	日帰り	宿泊	日帰り	宿泊	日帰り	宿泊	日帰り	宿泊	宿泊	宿泊	
参加傾向	性別面		男性型解消方向へ						中性型→女性化			男性型解消方向	
	年齢面	男	中年型→高年型				均一型		若者型→均一型		均一型→高年型		若者型
		女	均一型→若者型	均一型→高年型	中年型→若者型		中年型		中年型→均一型		若者型→中年型		解消方向
	年収面								比例する方向へ		比例する方向へ		高年型解消方向
	週休制度面		比例する方向へ								比例する方向へ		
同行者の種類	家族→友人知人				家族→友人知人								
活動の時期													
活動の目的	多目的→スポーツ		多目的→スポーツ		多目的→スポーツ						行差→多目的		

表 1.2 過去10年間に変化がなかった項目とその特徴(上)と
変化が見られた項目とその特徴(下)

5. 保養型宿泊レクリエーションの特徴

以上、海浜型レクリエーションを海浜リゾートにおける活動としてとらえ、その特徴を明らかにしてきた。しかし、「活動する、体験する」という機能はリゾートの有する機能のひとつにすぎない。他に「休む、くつろぐ」「見る、鑑賞する」という三つの機能を合わせ持つ空間をリゾートと考えることができよう。(図6)

そこで、他の二つの機能は現在の宿泊観光レクリエーションにおいて、どのような位置づけになっているのかを明らかにしておく必要があるだろう。

まず、「休む、くつろぐ」機能については、保養型(くつろぐ)とスポーツ型(活動する)との比較を行った。レクリエーション量の伸びは前者が0.15回/人程度で横ばい傾向であったが、前者は0.12回/人から0.37回/人へとこの10年間に約3倍にも急増していた。

また年齢面からみた参加傾向にも違いがみられ、保

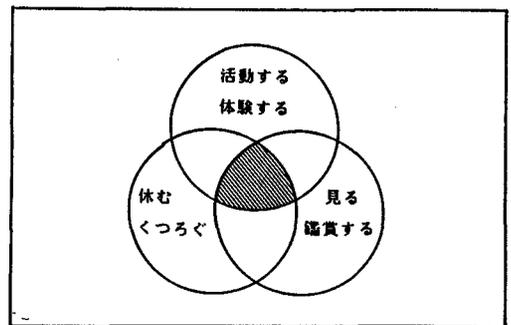


図6 リゾートの概念図

養型は年齢に関係のない均一な参加傾向を示すのに対し、スポーツ型では若い世代ほど参加の多い傾向が読みとれた。しかも、この両者の傾向は10年間ほとんど変化がみられていないことから、ほぼ固有の性質と考えられる。(図7)

次に、「見る、鑑賞する」機能については、リゾート空間の性格上「自然風景を見る」という活動が中心になる。自然美を楽しむことにより、心身の休養に役立ち、情操を豊かにするこの活動は、前述の「休む、

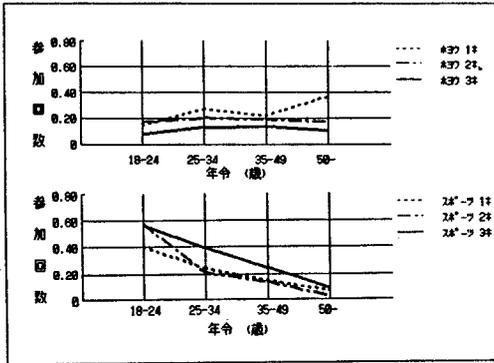


図7 保養型(上)とスポーツ型
レクリエーションの年齢別参加傾向

くつろぐ」機能とも密接に結びついている。

昭和58年の調査において、保養を目的とした人のうち「自然風景を見る」活動を行なった人の割合は59.3%であった。これはスポーツを目的とした人の場合の30.3%を大きく上回り(いずれも複数回答)、保養を目的とした人が自然風景に対して高い関心を持っていることがわかった。

6. 結 論

近年にみられる海浜型レクリエーションの発生の特徴にもとづく海浜リゾート成立のために必要な環境、施設の整備課題、方向について、本研究により明らかになったことは以下のように整理される。

(1)年齢面でタイプの異なる活動ができるような条件を組合わせて整備すること

海浜型レクリエーションは若者中心の参加傾向が強く、保養型の年齢によらない均一な参加傾向とは異なっている。したがって、これを是正する方向の活動を組合わせることが必要である。

山型高原リゾートでは、若者中心型の登山・ハイキング、スキーと高年中心型の温泉浴という活動が組合わされる結果、保養型の均一な参加傾向に近づいているだけでなく、時系列的にみても、これまで参加の少なかった属性の参加を互いに伸ばす結果を生んでいる。(図8)

(2) いろいろなシーズンにわたって活動があること

保養型はシーズン性が小さかったが、海浜型の場合には夏期集中を避けることには限界がある。

しかし今後も海浜型レクリエーションの多様化が進むことが予想されるので、釣り、ヨット・ボート、サーフィンなどの海浜型の中でも比較的シーズン性の小さ

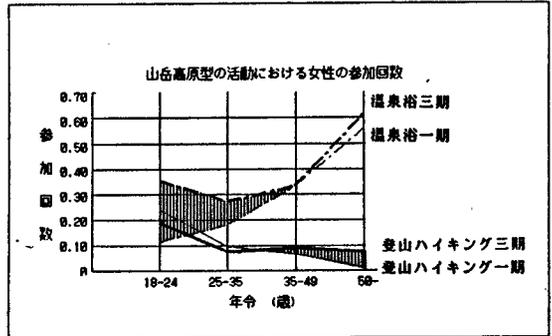


図8 年齢面でタイプの異なる
活動を組合せた例

い活動を導入したり、ゴルフ、テニスといった活動を周辺部に導入することで、ピークを分散させ、シーズン性を小さくすることが可能となる。

(3) “くつろぐ”ための基盤、施設の整備を行なうこと

従来の海浜型レクリエーションは、活動のアクティビティーの面だけが重視される傾向があり、施設面でも「休む、くつろぐ」機能に欠ける場合が多かった。今後は(2)で得た結論とも合わせ、水際線の整備のみにとどまらず、自然景を楽しめるような空間、例えば海浜公園のように周辺部の環境基盤を充実させていく形での整備が必要である。

注

1) (社)日本観光協会が1年おきに東京圏(半径50km以内)に在住する16才以上の男女を対象に、過去1年間に行なった観光レクリエーション活動の回数、内容などを調査したもの。標本数3500。分析に用いた第2回(S47年)から第7回(S58年)まで、計6回の平均回収率77.7%。

2) 日帰りの場合には、海や山などの郊外型レクリエーションのほかに、映画鑑賞、遊園地などの都市型レクリエーションを含んでいる。宿泊の場合には、出張や帰省あるいはそれらを兼ねた観光レクリエーションを除く、観光レクリエーションのみを目的とした旅行を対象としている。

3) 海浜型レクリエーションの活動として、海水浴、釣り・潮干狩り、ヨット・ボート、臨海プールの4つの活動をとりあげている。

4) 一人あたりの参加回数の伸び率で、実質ベースの伸び率となる。一期を100とした相対値をみている。

5) 山型高原型レクリエーションの活動として、登山・ハイキング、ピクニック、キャンプの3つの活動を取りあげている。